インフォーマティクス研究会

三上 春夫 JACR理事
千葉県がんセンター研究所がん予防センター(疫学研究部)

令和2年3月11日は保健予防関係者にとって深く記憶されるべき日となった。この日WHO(世界保健機関)は新型コロナウイルスについて、「パンデミック(世界的大流行)」の状態にあることを宣言した。昨年秋には中国武漢市で既に発生していたと思われるこの致死性感染症はCOVID-19と名付けられ、3月6日には世界で10万人超、日本でも3月11日には500人超と留まるところを知らず、3月13日には米国のトランプ大統領が国家非常事態宣言を発令、4月6日には日本でも安倍晋三首相により緊急事態宣言が発せられることとなった。このような全世界を巻き込んだ未曽有の混乱の中、私たちの企画したがん登録インフォーマティックス研究会も中止のやむなきにいたったのである。

この研究会は、2011年9月第20回地域がん登録全国協議会(JACR)学術集会(会長三上春夫)が千葉市で開かれた折、今回集会世話人の一人である三上を研究会長としてサテライト開催されたものである。

2011年といえば折しも3月11日に東日本大震災が発生し、その余波として福島第一原発事故と、これもまた未曽有の放射能汚染事故となり日本社会は悲嘆と混乱に沈みました。↗

↘研究会の趣旨は日常作業として手間暇のかかる、研究とも呼べぬような煩雑な事務仕事の集積であるがん登録の技術的側面を学術から捉え直して、がん登録を情報処理科学としてリファインしていこうというものです。その先には統計学のみならず、コンピュータ科学としてのデータベース構築の問題、個人情報保護の問題、日本語処理の問題等々を通じて、がん研究の本質につながる、欧米の関係者がCOEと呼ぶ(Center Of Excellence 学術的核心)としてのがん登録本来の姿が浮かび上がってくるに違いありません。

さて研究会開催は見送りとなってしまいましたが、世話人として開催を断念したわけではなく、折を見てぜひ、再度開催の機会をうかがっています。その際には皆様、ぜひご参集をお願いいたします。都立駒込病院の田渕先生のご尽力によりソフトウェアベンダーをはじめ数多くの優秀な関係者が参加を予定しておりました。これらの人材はがん登録の未来の力となって下さる方々です。また研究会の終わりに日本がん登録協議会(JACR)への勧誘も予定しておりました。協議会に新たなメンバーを迎えることは会の発展とともにJACRの経営基盤の安定化にもつながります。そのような開かれた集会となることを祈念して。

JACR委員会報告[学術委員会]

安田 誠史 JACR理事
高知大学医学部

西野 善一 金沢医科大学医学部公衆衛生学
宮代 勲 大阪国際がんセンター
祖父江 友孝 大阪大学大学院医学系研究科
伊藤 ゆり 大阪医科大学研究支援センター
森島 敏隆 大阪国際がんセンター

学術委員会は令和2年7月1日からモノグラフ編集の組織(通称モノグラフ編集委員会、以下、本稿ではモノグラフ編集委員会とします)を統合して新しい体制になります。令和2年6月末時点での学術委員会委員長としての立場で、二つの組織を統合した背景を説明し、また新しい学術委員会活動への期待を述べます。

学術委員会は、がん登録資料を用いた疫学研究、あるいはそれを支える技術開発での実績を表彰する学術奨励賞の審査、若手会員によるIACR(国際がん登録協議会)での演題発表を奨励する藤本伊三郎賞の審査、そして学術集会一般↗

↘演題からの優秀演題の選考審査を担当しています。また、学術集会長から要請があれば、学術集会でのシンポジウムの企画と運営を助言しています。一方モノグラフ編集委員会は、JACR Monographへ投稿される論文の査読審査に加え、学術奨励賞受賞者による学術集会での受賞講演要旨(受賞者が、学術集会抄録集に掲載の抄録に加筆修正を行ったもの)をJACR Monographに掲載するための編集、学術集会一般演題発表(口演・ポスター)の抄録(一般演題発表者が、学術集会抄録集に掲載の抄録に加筆修正を行ったもの)をJACR Monographに掲載するための編集も担当しています。

学術集会での優秀演題賞審査の対象になる一般演題の

次ページへ続く↗

↘数が増加しており、審査員増員が必要になっています。一方JACR Monographを拡充するために、投稿論文が増えても対応できる審査と編集の体制を整える必要があります。学術委員会とモノグラフ編集委員会は、学術集会での行事では連携して活動を行っています。これらの実情や見通しを踏まえ、令和元年12月9日に開催された令和元年度第5回理事会で、令和2年7月1日発足の新しい理事会から、学術委員会とモノグラフ編集委員会を統合し、統合後の組織が学術委員会という名称を引き継ぐことが承認されました。

統合後の学術委員会は、学術委員会とモノグラフ編集委員会それぞれが所掌してきたすべての業務を引き継いだ上で、学術委員会の学術集会企画への参画を見直します。第21回学術集会(平成24年度、高知)から第26回学術集会(平成29年度、愛媛)までは、毎回、「学術委員会企画シンポジウム」が企画され開催されていました。学術委員会が、地域がん登録の領域で継続性があるテーマを設定して報告者を選定し、シンポジウムを主催していたのです。全国がん登録の開始、および↗

↘院内がん登録領域の会員の増加などを踏まえ、学術集会でのこの企画は終了しました。しかし、全国がん登録でも院内がん登録でも、年度を超えて継続的に議論しなければならない課題、あるいは会員の意向を把握したい新しい課題が増えています。新しい学術委員会は、毎回の学術集会で、継続性を考慮しながらタイムリーなテーマでシンポジウムを企画し主催することを復活する予定です。

6月4~14日にWeb開催された第29回学術集会で、全国がん登録が定着したこれからは、全国がん登録資料を利活用してがん対策の企画と評価に反映させることが重要であるとの認識が、会員の間で共有されました。しかし、全国がん登録資料の利活用は、事務手続きが煩雑なこともあり進んでいません。登録資料利用の手続きが必要な事項を押さえた上で簡素化され、実践でも研究でも資料の利用が促進されなければなりません。新しい学術委員会が学術集会シンポジウムを場として、登録資料利活用の促進においても積極的な提言を行う組織であることを願っています。

JACR委員会報告[教育研修委員会]

大木 いずみ JACR副理事長

栃木県立がんセンター

杉山裕美　放射線影響研究所
伊藤秀美　愛知県がんセンター
寺本典弘　四国がんセンター
海崎泰治　福井県立病院
金村政輝　宮城県立がんセンター

教育研修委員会は、学術集会における実務者研修会の企画、総会時のがん登録実務功労者表彰、「がん登録の手引き」の刊行等を行っています。またIACR(国際がん登録協議会)からの情報提供として、今年度は「がん登録事業へのCOVID-19の影響に関する調査」への協力支援を行いました。

がん登録は「データを収集する」だけではなく、がん対策や研究に役立ち、かつ国際的にも通用する精度・質の高いデータを整備・維持し、さらには実際に活用していくことが求められています。仕組みが整っても今後はそれらを維持更新していくために、ますます幅広く様々な方法で日々教育研修委員会の活動を継続していかなければなりません。

がん登録は、正しく登録するために病理学の勉強や医学的な「がん」の知識が必要です。教育研修委員会ではそれらの情報を発信しています。また集計や報告書にまとめる方法なども情報共有しています。↗

↘全国がん登録は、法律のもとすべての病院等から正しくルールを知って提出いただけるように研修会が全国各地で開催されています。全国がん登録の研修会のあり方については、教育研修委員会で調査を行ったところ、共通する課題やそれぞれに対応して多くの工夫がなされていることがわかり、この度報告書にまとめました。

身近にがん登録のデータを整理・集計する立場からも、がん登録データをがん対策への活用やがん研究利用に幅を広げて活動しています。学術集会の研修会では、弘前大学の松坂方士先生に「がん登録資料に基づく研究の進め方」を講義していただいました。

これからは、学術委員会、広報委員会、Japan Cancer Information Partnership(J-CIP)活動、国際委員会とも連携しながら、多方面からがん登録をサポートし、情報共有したいです。